

A Comparison between Japanese and Thai Buddha Images

Junichi Kuwano*

Aoyama Gakuin University

Abstract

This article provides the author's point of view of Buddha images in Thailand in comparison with those of Japan. Buddha images in Japan are generally classified into Nyorai, Bosatsu, Myouou, and Tenbu. However, the Buddha images in Thailand can be classified according to the postures of the images, such as sitting, standing, reclining, or walking. All of them are considered as Nyorai in Japan (the appearance of the style after Shakyamuni had been "awakened"). The description of Buddha images employed here is based on historical periods, such as Dvaravati, Khmer, and Thai from the Sukhothai period. The topics on the Buddha images discussed here are: 1) the original work and image retouching, 2) Thai Buddha images for the days of the week, and 3) the gestures performed by the hands of the Buddha image.

Keywords : Buddha images, Nyorai, Image retouching

* Corresponding author e-mail: junn17@hotmail.com

タイと日本に於ける仏像の差異

栗野 淳一
青山学院大学

1. まえおき

日本とタイは世界でもまれに見る友好の歴史がある。とりわけこの600年に渡っての両国の友好の歴史は、ただ偶然にできたものではなかった。両国の先人達が何代にも渡って一生懸命に汗を流し、意を尽くした結晶である。タイには現在も多くの日本人が往来するが、彼等は一様に「タイは他の国に比べ外国に居るという違和感が少ない」と言う。なにが彼らをそのような思いにさせたかについては各人によって様々な要因があろうが、その背景の一つに、仏教が両国共通の文化基盤となっていることが挙げられよう。

日本が大乘仏教であるのに対し、タイは上座部仏教であるという違いはあるが、両国はこの仏教を基盤として国造りをしてきた歴史を持ち、更にそれぞれの国の伝統と重ね合いながら古来からの宗教と習合して今日に至っている。

仏教寺院はタイでも日本でもそれぞれのコミュニティの中心に位置してきた歴史を持ち、またそこに見る仏像は長い年月を経ながら、常に人々の信仰心を喚起してきたのだった。まさに仏像は歴史文化の目撃者であり、その形態に留意しながら思考することは両国の歴史と文化を理解する鍵であると考ええる。

2. 本稿の目的

以上のまえおきを踏まえ、今回は日本の学生がタイに来て仏教寺院を見学しているうちに抱く疑問を念頭に日本とタイの仏像の基本的な違いなどをここで考察し、もって学生の仏像理解向上のための一助とするものである。

3. 仏像の誕生

日本の仏像の特徴を述べる前に仏像の誕生について少し触れておきたい。そもそも仏像は釈迦の存命中は造られることはなかった。釈迦がインドで没したのは紀元前4世紀半ばとされているが、仏像が現れたのはずっと時代は下って紀元1世紀の半ばとされている。つまり、釈迦の没後はるか400年も後になつてのことである。それまでは釈迦の舍利(遺骨)や遺髪、更に足跡である仏足石に釈迦の存在が託されて、人はそれを信仰のよすがとしてきたのだった。しかし、時代の推移とともに仏教の布教活動も広範な地域へと発展することになった。するとそれら限られたいくつかの遺物だけで世界各地を網羅して布教することは物理的にも不可能なこととなっていく。更に各地で釈迦への信仰心が深まるとともに、釈迦を理想化し、釈迦を偲ぶための姿像を求める声が高まっていっていったのは自然のことであつた。即ち、遺物だけに頼っていたのでは布教が困難¹なことであつたこと、また釈迦追慕の念が深まっていっていったことなどがあいまって仏像が誕生することとなった。

¹ このため各地では釈迦の遺髪や舎利の偽物が出現する状況であつた。

そもそも最初に仏像が誕生したのはガンダーラ地方(パキスタン北部)であった。またマドゥラー(インド北部)でも相前後して造られ、それらが微妙に融合し、また洗練の度を加えたりして東アジア方面へと伝播していくことになる。

ガンダーラで最初に仏像が造られたのは前記したように1世紀の半ばであるが、中国でも既に仏教は1世紀に伝播していたが、仏像が造られたのは少し遅れて2世紀頃のこととされている。更にそれが朝鮮半島を経由して日本に伝わったのは6世紀のことであった。

日本へは仏教も仏像も同時に伝わったのであるが、その時代は飛鳥時代であった。ただ、年号は538年と552年の二つの説がある。



朝鮮半島の百済から現在の奈良県桜井市の大和川の支流である初瀬川上流に上陸したのであるが、その地は現在でも仏教伝来の地として大きな碑が認められる。

以後長い年月の厚みを加え、多少の曲折はあるものの、仏像は日本独特の文化に溶け込み、その美しさと深みによって人々に畏怖の念を喚起し、また感動を与えてきたのだった。

日本での仏教の歴史は、同時に仏像の歴史でもあるのだった。

Figure 1: 仏教伝来の地² (Source: Author, 2003)

4. 日本の仏像

まず、日本の仏像の特徴を俯瞰しておきたい。日本の仏像は大きくは4類型に分けることができる。即ち①如来、②菩薩、③明王、④天部である。仏像の数が極めて多いため、仏教にはそれだけ多くの真理があるかのような誤解を与えるが、実はそうではなく、仏法によるこの世の真理を解りやすくとき明かすために、それぞれの仏像が機能分担をして衆生に問いかけているのである。

² 奈良県桜井市初瀬川は6世紀に仏教、仏像が最初に日本へ伝わった地である。

得意満面でおごり高ぶる者には「いや、それではダメだ」と叱り、また失意の底で嘆き悲しむ者には「大丈夫だよ」と慈悲をたれる。それぞれ個々の立場からアプローチできるように多くの仏像が機能別に造られたが、それら個々の祈りを通じて最終的には宇宙の真理へと導いて行こうとするものである。

詳しくは後段に述べるが、その意味で全ての仏はひとつ、つまり一つの真理に様々な仏は結びついているのである。

4.1 如来

如来は数ある仏像の中で釈迦が最終的な悟りの境地に達した完全な状態を表しているため、最も上位の仏像であるとされている。仏像には釈迦の様々な姿が表されているが、その中で如来は前記したように信仰が完成された状態を表しているため、全てをそぎ落とし、身に飾るものもなく裸像の上にただ一枚薄い衣を掛けているだけのものである。座像か立像、あるいは涅槃像が殆どであるが、真理に達した状態であるため、動きも少なく、有名寺院の本尊として中央にどっしりと奉安されているものが多い。仏像が造られた当初は機能分化もなく、この真理に達した者という意味を持つ如来像だけであつた。



Figure 2: Nyorai (如来像)³

(Source: <http://www.butsuzou.com/jiten/syaka1.html>)

4.2 菩薩

菩薩はこれから悟りの修業に入ろうとする釈迦の王子時代の姿を一般に象徴すると言われ、身にまとうものも多く、持物もあり、また動きのある仏像が多い。従って美術的観点から言えば、動きと変化があるため仏像としての名作が多く、この菩薩を中心に、以下明王、天部に傑作が多いと言われている所以でもある。少し前にも触れたが、多くは仏教の慈愛の部分を担う仏像が多く、その点をイメージすれば母のような存在と言われる。

³ 頭頂部が膨らみ螺髪は2段になっていて、タイでも今日多く見られる釈迦仏は所謂如来形である。着衣も薄絹一枚だけである。



Figure 3: Bosatsu (菩薩)⁴

(Source: http://www.bell.jp/pancho/travel/taisi-siseki/temple/koryu_ji.htm)

4.3 明王

母のような慈愛に満ちた存在の仏像が菩薩であれば、叱り役である父親のような怖い存在の仏像も必要となる。それが明王であり、多くはインドで生まれた密教系の仏像を元にしていて、厳しい顔をしているものが多い。つまりは菩薩の慈愛と明王の憤怒が一つの対になっていて衆生を導くという機能を果たしているのである。



Figure 4: Myōō (明王)⁵

(Source: <http://www.ict.ne.jp/~jofukuji/gozanze.html>)

⁴ 写真は弥勒菩薩半跏思惟像、如来と比べて像に動きと表情がある。頭部には宝冠が乗っているのが特徴。

⁵ 写真は降三世明王。厳しい表情をし、足元に邪神(悪)を踏みつけている。

4.4 天部

如来以下天部までの仏像3類型はそれぞれの機能から人を信仰に導くものであるが、これらを護る、平たく言えば仏法のガードマンのような存在が天部である。悪を懲らしめ、退治するために怖い顔をして睨んでいるのもそのためである。仏法を護るための像であるから、その像自体に人を救うという機能はない。



ともあれ日本はアジアの東の果てに位置していることから、仏教が伝来した最後の地であり、それだけに仏像の多様さは他の国の類をみないほど多い。

Figure 5: Tenbu (天部)⁶

(Source: <http://wp.cc-life.com/?p=126>)

5. タイの仏像

次にタイの仏像であるが、これはスリランカ、ミャンマー、タイの上座部仏教に共通してみられることであるが、釈迦仏のみである。日本との対比で言えば、所謂如来像のみということになる。つまり、奈良の大仏は如来像であるから、タイの仏像は大小の違いはあるにせよ、奈良の大仏が立ったり、横になったりするということはあるが、概ねこの範疇に類していると考えて良い。これは前記したが菩薩、明王、天部などの仏像に見る装飾、動作、表情というものに乏しく、座像、立像、涅槃像がタイ各地で見られるものの、日本の仏像の多様さに比べると、いささか画一的と一般に言われている。しかしながら、時代によって、それぞれに特徴のある仏像が作られ、現在もタイの多様で重層的な文化を形成している。以下、その特徴をタイの時代区分に従って概観してみたい。

⁶ 阿修羅像は八部衆立像の一つであるが、特に人気の高い像である。

5.1 ドバラバティの仏像

ドバラバティはタワラワディとも言われるが、モン族が造った王朝で6世紀から11世紀まで特徴的な仏像が造られた。そもそもドバラバティはゆるい連合国家の集合体と考えられるので、その版図ははっきり



りとしたものがある訳ではない。従って各地に古代の仏像が見られるが、その特徴を一言で言えば素朴な石仏となる。日本で言えば、信州の野辺の道に置かれた道祖神のような風貌をしている仏像が多く、日本でも素朴な仏像として人気は高い。また仏像に見る表情も身近の人に見るような素朴な表情がにじみ出ている、見る者と仏像との距離をぐっと縮めてくれるものでもある。また、これらの仏像の中には所謂如来像ではなく、菩薩像も散見されるのが面白い。特にクブア出土の観世音菩薩は名作と言われ、現在はバンコク国立博物館に奉安されている。

Figure 6: ドバラバティの石造⁷

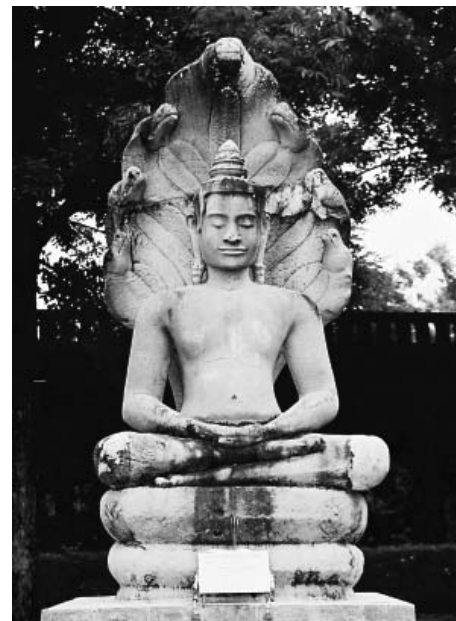
(Source: Author, 2004バンコク国立博物館)

5.2 クメールの仏像

クメールの仏像というのは所謂アンコールワット、アンコールトムに代表される仏像群である。そもそもクメール寺院は仏教とヒンズー教が習合した(あるいは時代の変遷によって重なった)ものが多く、その意味ではインドに見るヒンズーの様々な神像を見ることができる。例えばシバ神、ビシュヌ神などの像であるが、それ以外にも当時の王をかたどったものなどが見られ、その意味では多岐に渡る像が見られるのもクメールの特徴である。

Figure 7: クメール様式の仏像⁸

(Source: Author, 2004. プラ・ナライ・ラーチャニウェート)



⁷ 薄絹一枚を被った如来立像であるが、素朴さが滲み出ている。

⁸ ナーガがとぐろを巻く台座の上に禅定する釈迦坐像、その背後から頭上を覆う7頭のナーガというのがいわばクメール様式の定番である。

しかし、仏像に限って言えば、やはり釈迦仏が圧倒的に多い。頭上に7頭のナーガを従え禅定する釈迦座像が定番となっている。

これは南伝の仏教典に、釈迦が涅槃に入るために7週間に及ぶ禅定を行っている時に滝のような大雨に遭遇し、それが一週間も続いて洪水状態になった。その時に蛇神であるナーガが現れて、とぐろを巻き、7つの頭を屋根のように広げて釈迦を守ったという記述がある。それを釈迦仏としたのが、このクメール仏像の特徴である。即ち、釈迦がとぐろを巻いた台座の上で座禅を組み、光背部分に7つの蛇頭が見えるのがこの仏像の特徴である。勿論とぐろの巻き方や蛇頭、あるいは釈迦仏の頭部に多少の変形があって、それによって時代区分や地域などの特徴があるが、基本形は同じものである。

5.3 タイ族の仏像

タイの統一王朝はスコータイに開始し、現在までアユタヤ、トンブリ、バンコク(ラタナコシン)と4つの王朝の変遷を経てきている。特徴的なのは前記したように動きの少ない如来像であるが、その単調さを打破するかのように現れたのが、遊行仏である。

遊行仏は今日ではスコータイ仏として知られているが、タイ族が編み出した最高傑作である。一般的に仏教は悟りの境地に達することを到達目標にするが、特にスコータイではそれでは十分でないとされていた。悟りの境地に達した後に、その悟りを説き、人を導き、苦しみを救ってこそ、信仰が完成するとさ

れていた。それを仏像で表したのが、この遊行仏である。釈迦が悟りの境地に達した後に、父母にそれを説いて導き、父母の家を出る時の信仰を完成させて一步を踏み出した時の姿を現したのが、この遊行仏である。まるで体操の平行棒に乗るような姿であるが、これこそスコータイ仏の創造的な心意気を表すものであろう。タイ族は如来像を遊行仏によって、動きのある仏として創造したのだった。

これによって従来変化の乏しかった釈迦仏は生き生きとした動作を得たことになり、スコータイの見事な仏教文化の開花をそこに見ることができる。



Figure 8: スコータイの遊行仏

(Source: Author, 2004, スコータイ歴史公園⁹)

⁹ スコータイは日本で言えば奈良に比定されるタイ王国の古都で、その歴史公園には様々な動作をした遊行仏が見られる。

以後、いわばタイ族の仏像はこのスコータイ仏を起点として発達して来たことになる。時代によって多少の違いは見られるが、タイ族の歴代王朝はむしろこの伝統を保持しながら、今日に至っているのである。

6. 多様な見方

ともあれ日本の仏像が4類型によって様々な形で造られて来たのに対し、タイでは一般的に如来の1類型しか見られない。しかし、むしろ時代によって特徴が分かれ、それぞれの時代によって如来は様々な表情を表して来た。

このことが日本の仏像とタイの仏像を鑑賞する際にまず念頭におくべき違いと言ってもいいのであるが、学生らに解説すると、また別の見方から双方の違いについて質問を受けることがある。例えば、

① 「なぜタイの仏像は金色に光っているのに、日本のものは黒い仏像ばかりなのか？」

と問われたことがあった。

なるほど学生にとっては様式よりもこのことが不思議なことなのだろう。

例えば、有名な画家の絵画が多少色あせたからと言って、誰かが絵具で上塗りをするだろうか？芸術的な観点からオリジナリティは尊重され、それを作者が製作したままの姿で保存することが、日本では求められている。国宝文化財などは現状保持が定められている。

一方、これはタイに限らずミャンマーでも、また韓国でも見られることであるが、信仰の観点からすれば、仏は常に光輝いておらねばならず、またそれを護るのが信者のつとめとされている。従って、タイなどでも著名な寺院へ行くと、金箔が売られ、信者はそれを常時仏像に貼って功德を積むという具合である。

つまり、芸術的な観点からか、信仰という観点からかで対応が違うという説明が解りやすいかと思うが、筆者に言わせれば、余りにも安い電飾でクリスマスツリーのように仏像を取り巻いて光輝かせていたものを見た時には、むしろ興ざめたのを覚えている。自然のなすままに黒ずんだ仏像を日本で見慣れているせいかも知れないが、信仰という点でもそれぞれの視点が少し違っているのを見た思いである。

② 「タイの仏像は手の指の長さが同じなのはなぜなのか？」

という質問を頂戴したが、それもなるほどと思った。実はタイで最も美しい仏像の一つと言われるのはピサヌロークのワットマハタートにあるチナラート仏であるが、それ故にこの仏像を造る流派はチナラート派と呼ばれた。チナラート仏の特徴は下に垂れた降魔印の4本の指の長さが同じというものである。それを見た学生が不思議そうに質問したものである。

言うまでもなく、仏像のそれぞれの部分を取り出すとある意味ではグロテスクでさえある。例えば仏像の耳だけを取り出せば、肩まで垂れ下がったものもあるし、また目も弓を一杯に引き絞ったような目や眉を見る。更に多くの腕や手を持つ仏像など枚挙にいとまがない。しかし、全体として見た場合、それらが見事に調和してうまくバランスが取れている。それが名作と言われる所以である。



Figure 9: チナラート仏¹⁰

(Source: <http://www.buddha-images.com/postures.asp>)

言うまでもなく、仏像はそれが美しいばかりでなく、それを見た時に魂を揺り動かし、深い信仰心を喚起するために造られたものである。従って仏師は優れた芸術家であると同時に背後に強い信仰の心が必要ならなかった。そのような超人的な仏師が精魂込めて仏像を製作したのであり、その心を今覗き見る訳にはいかないが、それぞれの部分がいかに全体と調和し、美しいかを考えた場合、4本の指の長さがそろって同じ長さで降魔印を結ぶのがいいと考えたのであろう。そのように見ると、なるほどそれ故に一層調和しているように見える。

③ 「タイでは、なぜそれぞれの曜日によって仏像が違うのか？」

ということも良く聞かれることである。これはどのような考えから来ているのかということを聞きたい心境はよく解る。

例えば、我々日本人は血液型や星座占いなどをする。それによって幸運を呼び込もうとするのであるが、その機能をタイでは曜日が果たしているということになる。曜日にはそれぞれの仏像があるが、それとともに色や方角もある。

そもそもこの仏像はバラモンの9つの神が9体の仏像に変化したものである。従って今日でもバラモンの色彩の濃い、仏教と習合した寺院などへ行くと9体の仏像がある。曜日は7日しかないが、水曜日は昼と夜で別の仏像となり、更に全体の仏像が1体あるので全体では9体となる。自分の生まれた曜日の仏像に祈ると幸運を呼ぶと言われるので、それぞれの曜日がタイでは意味を持っている。簡単に言えば個人の幸せと御利益を願って祈るという訳であるが、それ以外にも例えば現国王の長寿を願って、国王の生まれた黄色のポロシャツを着るなどということも最近ではよく目にする。ともあれタイ人は曜日には敏感で

¹⁰ タイで最も美しい仏像の一つと言われるプラ・シー・ラタナー・マハタートのチナラート仏は、降魔印の4本の指の長さが同じなのが特徴である。

ある。ただ、ここで考察しているのは仏像のことであり、これらの仏像全ては所謂如来形である。前にも触れたが、タイの仏像は殆どが如来形なので、立つ、座る、寝る、歩くの違いはあるが、9体全てが如来仏である。

以上は一つの例であるが、タイと日本の仏像では当然に違いがあり、正直な目で仏像と向かいあった時に感じる違和感は双方にある。しかし、それがそれぞれの国の特徴であり、それによって独自の仏教文化が生まれて来たのである。同じ仏教文化を基盤としながらも、国は同じ国ではない。それぞれの仏教文化の発展の過程として現在に現れる諸様相をつぶさに見て、理解することが、また双方の国、国民を理解する重要な一つの道案内となるであろう。

7. まとめ

以上に見てきたことをまとめると以下ようになる。

- ① 日本の仏像は如来、菩薩、明王、天部の4類型に分けられるが、それらは時代を越えて造られて来たことに特徴がある。一方、タイの場合は殆どの仏像は如来形であるが、時代によってそれぞれの民族的特徴のある仏像が作られてきた。
- ② 仏像を作る目的はそのことによって深い感動を与えることであり、その思いは時代を超え、また様式を超えて、人々の信仰心を喚起してきたが、日本の場合とタイの場合では表現と保存の方法がそれぞれに違う。即ち日本は製作時のものを忠実に保存しようとするが、タイの場合は金箔を貼るなど常に光輝くことに腐心する。
- ③ 信仰心を喚起するためには仏師は単に芸術的な技術がすぐれているばかりではなく、その背後に強い信仰心が必要ならなかった。その技術、信仰心は日本の場合単一民族の王朝が続いたために継続されたが、タイの場合は王朝によって民族が変化したのを境に作風も大きく変わってきた。
- ④ 日本の仏像は姿形、種類も多く、機能も分化されているため仏教寺院の本尊も様々であるが、タイの場合はどの寺院も本尊は釈迦如来、即ち釈迦仏のみである。
- ⑤ 日本とタイは仏教という共通基盤を持ち、それが両国の人々の心情に通じるものがあるが、当然のことながら文化伝統は同じではない。大乘仏教と上座部仏教という違いもあり、勿論仏像も同じではない。しかしそれがそれぞれの国の文化であり、そのことを考察することによって一層両国の理解が増進される。

References

- Ishii, A. (1998). *Butsuzoo no Mikata*. Ikeda Bookstore. (in Japanese)
Kuwano, J. (2005). *Tai no koji wo aruku*. Sairyusha.(in Japanese)